

くろしお協力隊に聞く



【今月の担当者】
地域おこし協力隊
(株)缶詰製作所担当
福本 麻侑

Q 9月から協力隊に着任した福本さん。黒潮町の協力隊を選んだ理由を教えてください。

A 私は短大で缶詰や瓶詰めのことを学んでいたのですが、前職では学んだことが活かせず、缶詰の仕事がしたいと思っていました。また、缶詰の防災の一面を知り、人の命をつなげられる食品なのだと見方が変わった出来事があり、その後、缶詰製作所の商品に出会いました。「34」って何だろう」と気になって会社見学に行った際に津波のことを聞いて、「覚悟を持って作っているんだ」と思いました。7月ごろにその缶詰製作所で協力隊の募集をしていることを知り、自分のやりたい仕事内容にも合っているし、チャンスだと思い、黒潮町の協力隊を志望しました。

Q 現在、仕事ではどういったことをしていますか？

A イベントでの缶詰販売や、「高知県版HACCP（高知県食品総合衛生管理認証制度）」という、食品衛生管理がきちんと行えており、製品が安全であることを示すことができる資格を取得するための書類の作成をしています。現在22種類ある商品の一つひとつを調べていると、製作工程も複雑で、入っているものも違って、商品への愛がひしひしと伝わってきます。栄養面を考えながら美味しさを追求してきたからこそ、毎日食べたいと思える缶詰ができているんだと。イベントで販売している時にも「こういう商品が欲しかった」と言っていただけには嬉しく思います。



デスクで作業をする福本さん

協力隊から一言！

黒潮町缶詰製作所で、缶詰製作を通して町に貢献できるような活動に尽力します。

Kramer's Corner

クレマのコーナー



今月のテーマ

1本のガラス瓶で黒潮とテキサスを繋いだ男

1991年に、海流を研究しているアメリカのテキサス州出身の11歳の男の子のブライアンさんからメッセージボトルが海を渡り黒潮町近くの海岸まで辿り着きました。今年、アメリカにブライアンさんに実際に会いに行きました。ボトルが流れ着いてから32年の間、ブライアンさんは素敵な家族を持つ立派な父親に成長してきました。僕たちを温かく歓迎し、ボトルプロジェクトについていろいろと教えてくれました。行く前にビデオチャットで話したが、実際にブライアンさんに会えたのは本当に貴重な機会でした。彼のインタビューの撮影やアメリカのさまざまな興味深い場所の撮影を撮り、ボトルプロジェクトの記録や手紙や地図を実際に見たり触ったりし、ブライアンさんと友情の絆を結ぶことができました。

インタビューしている時、ブライアンさんがボトルプロジェクトについてわくわくして語る姿はとても感動的でした。彼が子供の頃に抱いていた好奇心が大人になっても続いていることがわかりました。世界中からボトルを見つけた人たちからの返信も見せてくれました。ボトルプロジェクトのおかげで遠く離れている文化や国をつなぐことができ、今回の僕たちとの出会いもそのつながりの一つになりました。たった一本のガラス瓶が地球の反対側の人を結びつけることができるなんて、本当にすごいと思っていました。

ブライアンさんのインタビューは後日IWKで放送されますので、ぜひご覧ください。ブライアン



ブライアンさんのメッセージボトル

さんの話が黒潮町の人々、特に子供たちの好奇心を刺激し、ブライアンさんのようにこの広い世界に興味を持ち、異文化とのつながりを作り、いろいろと挑戦することを心から願っています。

今月の使える！英語

Broaden your horizons!
視野を広げよう！

